

第4回8020童話賞

一般の部 「最優秀賞」作品

「キュウリの丸かじり」

八十八さんと花さん夫婦は共に75歳、最近年のせい、少し元気がありません。

夫婦は町で小さな、本当に小さな駄菓子屋さんを営んでいます。

お店には飴や、チョコレートといった甘いお菓子が、大きな袋に入れられ並べられています。昔食べられなかったお菓子を子供達にいったい食べてもらおうと、始めた店です。毎朝5時半に起き、お店のガラス戸も開け、ギィ、ギィ、ギィ、ガッタン、力を込めないと開きません。

八十八さんはお店を掃除し、そしてお店の前の、花の手入れをします。花さんは裏の畑で野菜の世話です。

「ハナハン（花さん）、今年の朝顔はなかなか蕾がでませんね。」

「ヤソハチハン（八十八さん）、畑のキュウリも大きくなりませんね。朝ご飯ですよ。」

卓袱台にはお粥、刻んだ香の物、豆腐のみそ汁が並んでいます。咬まなくてよい物ばかりです。

「イタダキマフ」言葉が変わですね。あれ？二人とも歯が一本も無い！少し老けて見えるのもそのせいだったのですね。

二人は子供達に、おいしいお菓子だけを食べてもらおうと、毎日試食をしていました。そのうちむし歯ができてしまいました。お金が無く歯医者にも行けず、歯が無くなってしまったのです。

「ヤソハチハン、今年はおリンピックですね。」

「ハナハン、東京で開かれるんじゃないの、虎之助ハンは行くんじゃないかな？」向かいの大きな門構えの家は、虎之助さんの家です。

建設業や不動産業など手広く仕事をし町議会の議員もしています。虎之助さんも朝ご飯です。

「オーイ！ 朝ご飯はまだか。」

テーブルには柔らかい白いご飯、卵焼き、刻んだ香の物、豆腐のみそ汁、ほぐした焼き魚、これまた柔らかい物ばかり。

そうなんです虎之助さんも歯が全く無いんです。

「俺は仕事が忙しく歯を磨く暇なんかなかったゾ！」なんて言っています。

ある晩、九時過ぎ虎之助さんが酔っぱらって帰って来ると家の門の前に小さな汚れたお坊様が倒れていました。

「おいコラ！お前は誰じゃ、何をしておる？」お坊様は消え入るような声で「一週間何も食べていません。お願いでございます。何か口に入る物を。」

「ナニ？臭いおまえなんか、食わせる物はないどっかに行ってしまうえ！そうだ！」

お坊様の襟首をつかむと八十八さんの家の前に放り出し、戸をドンドンと叩き、

「ヤイ ヤソハシ、このちび坊主に何か食わせてやれ！」

と大声で怒鳴って自分の家に帰っていきました。

「ヤソハチハン、外で大きな声がありましたよ。」

「虎之助が怒鳴っていたようじゃな」

といいながらガラス戸をギイ、ギイ、と開けると外にお坊様が倒れていました。「お坊様、どうなさいました？」

「お腹が空いて動けません。」
八十八さんは、お坊様をそっと抱き上げ家の中につれてきました。

「ハナハン、お坊様に何か食べさせてあげましょう。」

「お坊様すぐに支度しますからね。」
と台所で準備を始めました。

「こんな物しかありませんが、食べてくださいね。」

お粥と刻んだ香の物、豆腐のみそ汁、めざしが一匹。

お坊様はにっこりほほえむと「ありがとうございます。」

「言いながらゆっくり食べ始めました。食べ終わると同時に、あまりにも疲れていたのか、そのまま寝てしまいました。」

「お坊様はしばらくお風呂にも入らなかったようですね。」

「風呂で綺麗きれいにしてあげようか。」

八十八さんはお風呂へ抱いて行き、二人でそっと、身体を洗ってあげました。

黒い垢の下から真っ白い綺麗な肌が現れ、フワッとよい香りがしてきました。

「疲れているようですね。このまま寝させてあげましょう。」

「ワシの布団に寝かせてあげなさい。ワシは座布団で寝るから心配ないから。」

朝5時半いつものように二人は起き、仕事を始めました。

「ハナハン、お坊様にはゆっくり寝てもらいましょう。」

とガラス戸をキイ、キイ、と開け、花のお手入れ。

「ハナハン、いっぱい朝顔の蕾ができていますよ。」

「ヤソハチハン、キュウリも大きくなってき

ましたよ。」

夕方、お坊様はやっと起きだし三人で夕ご飯をいただきました。

お粥、刻んだ香の物、豆腐のみそ汁、めざしがお坊様に一匹、夫婦で一匹。それでも、すごくおいしい夕ご飯でした。

食べ終わると同時にお坊様はまだ寝てしまいました。

次の朝も、夫婦は五時半に起き、そっと仕事を始めました。

八十八さんがガラス戸開け、ス、ス、ス、と滑るように開きました。

外に出るとびっくり大きな朝顔がいっぱい、紫、ピンク、青、などの花を咲かせていました。

「ハナハン　すごいよ朝顔が満開だ！」

花さんは箆へらいっぱいキュウリを抱え

「ヤソハチハン　こんなに大きなキュウリが、いっぱいになりましたよ。おいしそうですよ。」

お坊様は今日も夕方起きてきました。

夕ご飯はいつものようにお粥と刻んだ香の物、豆腐のみそ汁そしてお坊様には今朝とれたキュウリ、夫婦のキュウリは細かく刻んであります。

お坊様はキュウリを丸かじり、ポリポリおいしく咬んでいます。

夫婦も刻んだキュウリをおいしく食べました。

昨日よりおいしい夕ご飯でした。

でも二人とも心の中で「もう一度お坊様のようにキュウリを丸かじりしてみたいな。」と思いました。

そのころ虎之助さんは、自分の家の二階から八十八さんの家を眺め、

「最近ヤソハシの家から良い香りがしてくるな。いつもは真っ暗な家がなんだか明るいぞ。覗いてみるか。」

虎之助さんが八十八さんの家の裏戸うらどの間隙すきま

から覗くと、二人の前にフワット明るく光っているようなお坊様が座っています。

そして深々と頭を下げ

「本当にありがとうございます。お二人に助けていただきました。私は阿弥陀様あみださまの弟子の無丹と言う者です。人間の世界で修行している者です。今度のことで人間の優しさが解りました。お礼に一つだけ望み事を叶えさせてください。」

「私達、今のままで本当に幸せです。何も欲しい物はありませんよね ハナハン。」

「その通りですよ、ヤソハチハン。」

それを盗み見していた虎之助さんは戸を蹴破り、大声で、

「やい坊主お前を助けたのはこの俺様だ！ヤソハシの家につれてきてやったんだぞ！俺の願いも叶えろ。」

お坊様はニッコリ微笑むと

「その通りですね。ありがとうございます。それでは一つ叶えましょう。」

虎之助さんはニヤッと笑うと

「そうだな、3億円くれ！」

「わかりました明日の朝を楽しみにしていただきます。」

「ガハ、ガハ、ガハ。」

と笑いながら虎之助さんは帰っていききました。

「お二人はいかがしましょうか。」

「困ったな・・・そうだ！キュウリを丸かじりしてみたい。歯が欲しいね、ハナハン。」

「それは夢の様な話ですね。ヤソハチハン。」

「歯は何本欲しいでしょうか？」

「え？ハナハン、人の歯は何本だったかな。」

「一〇本では少ないみたいだし、三〇本では多いみたいだし。その真ん中の二〇本もあればいいでしょうね。ヤソハチハン」

「わかりましたお二人に二〇本歯をさしあげましょう。明日の朝を楽しみにしていてく

ださい。」

次の朝いつものように起きるとお坊様は良い香りだけ残り消えていました。

「おはよう花さん。アー！歯が萌えている！」

「おはようございます八十八さん。ワアー私も歯が萌えている。」

早速キュウリを摘んで丸かじりしてみました。

パリ、ポリ、コリ「すごく美味しい！自分の歯で咬んで食べるとこんなに美味しいんだ。」

「本当に美味しい。歯は大切ですね。これからは大事にしましょうね。」

顔も若返り、言葉もはっきりしています。

二人は手を取り合って喜びました。

そのころ、虎之助さんの枕元にも3億円の札束が山のように積んでありました。

「ヨシ よくやったたくそ坊主。お祝いだ！餅をつけ、鯛の塩焼きでお祝いだ。」

家の者が総出で準備をしました。虎之助さんは「めでたい、めでたい！」と鯛の塩焼きを食べ始めました。

すると「イデ、イデ、イデ！」あまり咬ま

ないで(咬めない)食べたので鯛の骨が喉のどに刺さってしまいました。

「そうだ餅もちを丸飲みしよう。」

虎之助さんは餅をゴックン。

しかし、唾が少なくなっていたので、お餅が喉に支えてしまいました。「ウー」と虎之助さんは倒れてしまいました。

五年後あのお坊さんが、再びこの町を訪れました。

二人は80歳になっても「花さん」「八十八さん」と呼び合い、仲良く元気に働いています。

お店の前にはお花がいっぱい。

お店の中は飴や、チョコシートが、可愛らしい小さな袋に詰められたり、おせんべいやゼリーなどが並んでいます。

おやっ！、歯ブラシや歯磨き剤も売っていますよ。

あれ あれ あれ

大きな、大きなポスターが風にゆられています。

「食べたら磨こう大切な歯」